

平成 26 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2014年4月～2015年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表  
します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満  
たないもの、報告書が2年連続して未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧  
告させていただくことがありますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 大阪市立関目東小学校

種別  保育園・幼稚園  小学校  小中一貫教育  
 中学校  高等学校  中高一貫教育  
 教員養成  技術/職業教育  
 特別支援学校  その他 ( )

住所 〒 536-0008  
大阪市城東区関目4-12-15

E-mail : e172114a@ocec.jp

Website : http://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=e691553

児童生徒数：男子 260 名 女子 223 名 合計 483 名  
 児童・生徒の年齢 6 歳～ 12 歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ( )

#### 4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

本校では、昨年度の反省から、今年度はE S Dの基盤となる豊かな人間関係の構築を目指して、自尊・他尊感情を高めるために人権にかかわる活動・学習をさらに深めることにした。

また、昨年度に引き続き様々な国際交流や国際理解の学習・活動の場を設定するとともに、日本の文化を知り学ぶ場も持って、文化の違いを認め合うことのできる子どもを育てることを大切に取り組みをすすめてきた。

1年生では、「豊かな人間関係」を目指して一連の活動に取り組んだ。「おはよう名人・さよなら名人」「上手なごめんなさい」「よいとこビンゴ」「自分カルタ」などで、あいさつの大切さや自分をしっかりとみつめることの大切さを学んだ。さらに「自分の木」「出会いのカード」に取り組むことで、自分の良さに気づくとともに友だちを理解し信頼関係を深めていくことができた。そして、「カンカンくんとなかよしになろう」ではトラブルがあった時の対処法を具体的に学ぶことで所謂「キレル」ことを無くし怒りの感情と上手につきあえる子どもを育てていこうと取り組んだ。児童はお互いの表情をよく観察して周りの人々の感情に興味を持ち、個人差にも気づいていった。そして怒りをコントロールするスキルを習得し、相手の怒りを大きくしないように気をつけたり、日常生活でも使ってみようとしたりする児童も出てきた。

2年生では児童が1年生のときに育んできた自尊感情を大切にしながら周囲の人との「豊かな人間関係」をさらにすすめることを目指した。

「ふわふわ言葉とチクチク言葉」「出会いのカード」に取り組むことで、言われて嬉しい言葉が教室でたくさん聞かれるようになり、「自分の花」で自分の得意なことやがんばっていることに気づくようになった。さらに「ほめほめ名人」「はげまし上手」では、友だちのがんばりをほめたり困っている友だちをはげましたりする場面を想定し、ロールプレイをしてそのときの気持ちを考え日常生活の中でよいほめ言葉や励ましの言葉が自然に使えるように活動をした。活動の後には今までうまくできていなかった友だちへの声かけが実際に出来るようになった児童も出て、活動の効果を実感することができた。

国際交流では、昨年度1学期に在籍したミャンマー人児童と帰国後も交流が続いており、そのつながりでミャンマーの養護施設との交流もできた。3学期にはタイにルーツを持つ児童の保護者からタイの文化や生活を学ぶことができ、まわりの児童がタイを理解する良い機会となった。今後も当該児童の気持ちを大切に自尊感情を高めていくとともに、周りの児童と互いの文化を認め合い、違いを超えてあたたかい人間関係を築いていきたい。

3年生では「自然との共生」をテーマに、身近な自然に目を向けて活動した。春の全校遠足では鶴見緑地で自然観察園を訪れ、自然探しを楽しんだ。2学期には自分が考える「自然」を探す活動をし、「自然の音を描こう」という題で、自然の音を聞いて思い浮かぶ風景を思い思いに絵で表した。この活動を通して「人の手で守られている自然がある。」「人によって壊されている自然もある。」という気づきがあり、自分と自然とのかかわりを考えるひとつのきっかけとなった。3学期には昨年度に引き続き近畿大学の環境サークル『Feelink』の大学生に来ていただき、植物の一生について学んだ。児童は寒い冬の間には春の準備をしている植物の生命力に感動し、学校中の冬芽を探した。さらに大阪市立自然史博物館から中谷憲一さんをゲストティーチャーに招き、災害の話から川のはたらき、身近な城北川のこと、生物多様性に至るまでの授業をしていただいた。そして児童は「2050年までに私たちができること」を考えた。児童は川のはたらきを知り、学校の横を流れている城北川のすごさに気づき、自分にできることを探し始めた。

4年生では「自然と人権」をテーマに、身近な自然を学び、地域の歴史を知り、「豊かな人間関係」を目指す取り組みをした。

春の全校遠足では、鶴見緑地で活動する『アダージョ』の方々と共に、自然観察園で今まで気づかなかった様々な生き物を見つけ、顕微鏡で観察した。大阪市の環境局のプログラム「川の学習」にも参加し、魚や生き物を観察しようと城北川に集魚器を投げ入れた。残念ながらこの日は収穫がゼロだったが、水質検査もして、川の水をきれいにする事の大切さと大変さを知った。

地域の歴史では、菅細工保存会の方々の協力で菅のコースター作りを体験した。また、水都の会の方をゲストティーチャーに迎え、幻の大阪国技館のお話も聞いた。児童は、葦のはたらきを知るとともに、学校のそばにとっても立派な国技館があったことに驚いた。

「豊かな人間関係」では、学年末の「二分の一成人式」に向けて自分をふり返し良いところを見つけたり、友だちの良いところを見つけて発表会をしたりした。一連の取り組みによって自尊感情が高まり、友だちとの関係も改善され、学級での話合いや活動も積極的に協力して行えるようになってきた。

5年生では地球規模の諸問題として、一年間を通して「綿と綿に関わる人権問題」に取り組んだ。

綿を植え、育てながらインドの綿農家を現状を知り、問題点を明らかにして自分たちにできることを考えた。このような活動と合わせてインドの綿農家の村の学校と交流もする『スクールコットンプロジェクト』では、同じくユネスコスクールである奈良法隆寺国際高校の生徒が来校し、授業を通して本校児童と共に活動した。

5月には『世界一大きな授業』に参加した。このとき、スクールコットンプ

プロジェクトの一員である大阪女学院大学の大学生が来校し、「世界一大きな授業」を行った。インドの文化体験ではサリーの試着体験、ヨガ・古典舞踊の体験授業も行った。秋には学習園で収穫した綿の実で綿くり、綿打ち、糸車、手つむぎの体験をした。自分たちの手形で友情のフラッグを作り、インドの学校に贈るとインドの児童・生徒もお返しのフラッグを送ってくれた。そこではお互いの手形に自分の手を重ねて遠く離れた友達を思い合う子ども達の姿が見られた。

奈良法隆寺国際高校の生徒たちが来校した際には綿の供給チェーンの学習を行い、問題点を見つけた。児童労働や農薬による悲惨な被害等を知り、児童は何とかなければという気持ちを高めた。そしてエシカル商品やフェアトレードを知り、産地から遠い都会に住む自分たちの消費行動の影響の大きさに気づいた。その後NPO「フリーザチルドレンジャパン」の授業で、『GIFT+ISSUE=CHANGE』（好きなこと+関心のある問題=世界を変えられる）の考え方を知り、自分にできることを決めた。そして1年間学んだことを国語科でリーフレットにまとめ、つむいだ綿を使って小さな織物を仕上げた。

6年生は「バナナを通して考える『世界人権宣言』」に取り組んだ。きっかけは、2014年4月27日、サッカーの試合中に人種差別的な考えからバナナを投げ入れた事件のニュースが世界を駆け巡ったことで、世界人権宣言の学習を取り入れてバナナ農家の人権問題や環境問題を考えていくことにした。

5月に校庭にバナナを植えることから始まったこの活動は、日本に一番多くバナナを輸出しているフィリピンのことを学ぶことから始められた。まだまだ世界のことを知らない児童の視野を広げるため、「世界がもし100人の村だったらワークショップ編」などの教材を使いながら活動を進めた。そして世界で過去に、また現在もなお存在する人権侵害の問題を知り、考えた。次に児童が漠然と「平和で問題のない国」と思っている日本についても、人権侵害があることを学んだ。そしてその後、自分たちの学級のひとりひとりの人権は守られているのか、人間関係はどうなのかを考え、自分たちの願いを書いた。

2学期には、大規模なプランテーションで作られ一般に流通しているキャンディッシュバナナと、無農薬で民衆交易という形で日本に入っているランゴンバナナの違いを学習した。この学習の中で、バナナ生産者の中には人権が守られず大きな被害を受けている人がいることを知り、消費者という自分たちの立場で出来ることを考えるようになった。

ザンビアで捨てられていたバナナの茎を使って1本の木も切らずにバナナペーパーを作っている名刺会社の方にもゲストティーチャーに来て頂き、やりたい気持ちがあれば、だれでも世界に貢献できることを教えて頂いて勇気もらった。

『日中ESD学び合い交流会』に参加した7名の児童は、昨年度から学んでいる児童労働の問題や今年学んだ人権問題をプレゼンテーションにまとめて発表した。1年間のまとめとして『ESD伝えようプロジェクト』を立ち上げ、

区役所に学んだことをまとめた掲示物を貼らせてほしいと話に行くこと、フェアトレードやオーガニック商品に熱心な大手スーパーに無農薬バナナの取り扱いをお願いに行くこと、 balanゴンバナナ・自分たちでつくったフェアトレードビーズのストラップ・バナナの葉を使ったブックマークの販売することなど、自分たちの願いを伝える具体的な活動を実行することができた。

学校全体としては、各学年の活動に加えて5年連続となる「JICA交流会」を2学期に行った。JICA 関西に来る研修員さんとの交流事業である。本校では開発途上国から来日される研修員さんの母国に興味を持ち、各学年が交流計画を立てて半日を共に過ごしている。言葉・肌の色・文化の違いなどを超えて、すぐに研修員さんと仲よくなる児童は、違いをむしろ楽しみ、休み時間には控え室まで遊びに誘いに行く。研修員さんは児童の日本文化の紹介に興味を持ち、たった半日の交流でも時間が来るとお互いに心から別れを惜んでいる。体を使って実際に触れあうこのイベントは開発途上国の方々と触れ合う貴重な機会となっており、児童の地球市民的な心を耕すのに役立っている。

- 今年度の主な活動は、
- 1、2年生・・・昔遊びとあそび歌体験
  - 3年生・・・粘土で和菓子作り体験
  - 4年生・・・歌とダンス
  - 5年生・・・習字とソーラン節体験
  - 6年生・・・歌、リコーダー

また、3学期には昨年度から連続開催となる『地球のステージ』の鑑賞を行っている。『地球のステージ』は、NPO「地球のステージ」の代表、宮城県でクリニックを開業している医師の桑山紀彦さんの映像コンサートステージである。世界で様々な問題を抱えながらも力強く明るく生きる子ども達、大人達の映像を見ながら歌を聞いて、児童は世界を知り考えていく。東日本大震災を経験した桑山さんの言葉と歌に児童は感動し、自分を映像や音楽の中にはめ込んでいき、共感し、心からの感想を書く。

このような各学年の学習・活動を通して、本校では「自分と周りの人とのつながり」「他のいのちと自分とのつながり」「世界で起きていることと自分とのつながり」を大切に考え、自分にできることを行っている。

(2) 活動時間について(下記から選択して下さい。)

- 通常の授業時間を使用(総合的な学習の時間を含む)
- 時間外活動の時間を使用
- ユネスコクラブの活動として実施
- その他( )